

## うつ、不安、怒りと血中アルドステロンの関係に関する研究

研究分担者 水野杏一  
三越厚生事業団 常務理事  
日本医科大学名誉教授

### 研究要旨

**研究目的:** 精神神経因子の異常がレニン・アルドステロン系の活性化と関連することが報告されている。また、アルドステロンは心筋線維化や血管障害を介し心疾患の予後を規定する。しかし、心疾患において両者が関連するか否かは不明である。本研究ではかかる点を明らかにするため、心疾患においてうつ・不安・怒りを調べアルドステロンとの関係を調べた。

**研究方法:** うつは PHQ9、不安は GAD-7、怒りは STAS 用い、心疾患 36 例に精神神経因子の調査を行うとともに、蓄尿中のアルドステロン濃度を測定した。

**結果:** 怒りの重症度とアルドステロンは弱い正相関、不安とうつは弱い負の相関があった。

**まとめ:** 怒りとアルドステロンの間には交感神経活性化が関与する可能性が示された。うつ、不安に関しては今後の検討が必要である。

研究協力者氏名	所属施設名及び職名
福間長知	日本医科大学 循環器内科 准教授
加藤和代	日本医科大学 循環器内科 講師

### A．研究目的

精神神経異常に関連する心疾患の予後悪化の原因を、心筋線維化などを介し心疾患の病態に影響を与えるアルドステロンより解明すること。

### B．研究方法

心疾患のため入院をした連続症例を対象として、退院前の病態が安定した時期に精神神経因子として PHQ9 によりうつを、GAD7 により不安を GAD-7、STAS により怒りを調べ、同時期の蓄尿アルドステロン排泄量との関連を検討した。

（倫理面への配慮）

対象全例に対して、本計画を説明し了解を得ている。なお、本研究は侵襲的な要素を含んでいない。また、データベースに個人を特定できるものを省くなど漏洩にも万全の体制を図っている。

## C．研究結果

怒りの重症度とアルドステロンは弱い正相関、不安とうつは弱い負の相関を認めた。

## D．考察

精神神経因子はレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系の賦活化と関連すると報告されているが、本研究の結果は異なるものであった。心疾患においては精神神経因子毎にアルドステロンとの関連が異なるなどより、心疾患の病態と相互に影響し合うことが推測される。そこで、心疾患予後における精神神経因子の影響を明確にするため、アルドステロンに加え交感神経活性など他因子の検討を行い、研究を進めている。

## E．結論

心疾患における精神神経因子異常とアルドス

テロン分泌は、他の因子と相互に関連しながら病態に影響をおよぼすと推測される。

## F．健康危険情報

現時点において、本研究の成果が健康被害と関連するものはない。

## G．研究発表

### 1．論文発表

未

### 2．学会発表

未

## H．知的財産権の出願・登録状況

### 1．特許取得

未

### 2．実用新案登録

未

### 3．その他

未